

美術部へようこそ! 埼玉県川口市立元郷中学校

元郷中学校は、校内の環境美化のために、さまざまな活動をしています。今回は古い校舎を生まれ変わらせた「校舎改造計画」の活動をご紹介します。

クロッキーで始まる部活動

放課後、しんと静まり返った美術室で、生徒たちはモデルを見つめ、真剣に鉛筆を走らせている。元郷中学校の美術部の活動は、毎日このようなクロッキーからスタートする。

「人物をうまく描けるようになりたい」という生徒がとても多いんです。ですから、毎日5枚、クロッキーを描かせるようにしています。1年経つとかなりの枚数になり、それを振り返ると、確実にうまくなっているのがわかる。生徒たちに達成感を味わってもらいたくて続けています」と、顧問の木塚 暦先生は語る。

部員数は計38名。みんな仲がよく、とても活気がある。特に目を引く活動は、2013年夏に行った「校舎改造計画」だ。

校内の環境美化に役立ちたい

本校の南校舎は築50年以上が経過し、壁がすすけて薄汚れていた。それを見た木塚先生は、なんとかして壁をきれいにしたいと思い立つ。美術部の生徒たちに提案すると、みんなすぐに乗り気になり、夏休みを利用して南校舎を生まれ変わらせる「校舎改造計画」を立てた。

まず、ブラシを使って壁の汚れを落とす。実は、絵を描くよりこの作業がとても大変だったそうだ。「長いブラシを使って、上の方まで

磨いていくのは根気のいる作業でした。でもピカピカになって気持ちよかったです」と生徒たちは振り返る。約10日かけて、壁を磨き、階段の手すりにやすりをかけて、きれいにしていた。

そして、いよいよ絵を描く段階。壁画に統一感をもたせるため、青系の絵の具を使って線画で描いていくことに決めた。1階の壁、階段わきの壁、2階の壁と、場所ごとに分担を決め、海外の壁画作品やプリミティブアートを見ながらイメージを膨らませ、図案を考えていった。

竜を描いた生徒は「迫力を出すため、竜の首をぐるっと曲げて描くのが難しかった。こんな大きな絵を描くのは初めてだから緊張したけど、すごくいい体験だった」と話す。また、「真夏に制作したので、暑さとの戦いだった(笑)」と、当時の苦労を振り返る生徒も。みんな「仕上がったときはすごく達成感があった」と口をそろえる。

「普段から、校内行事に合わせて廊下や体育館の飾り付けをするなどの活動をしており、校内の環境美化にひと役買っています。この『校舎改造計画』もその一環。おかげさまで、いろいろな方からお褒めの言葉をいただき、それが生徒たちの自信にもつながっているように思います」。

そう話す木塚先生を、生徒たちは笑顔で見つめていた。



老朽化していた校舎の壁面が、美術部員の手によって美しく生まれ変わった。



毎日クロッキーで、人物を描く練習をする。生徒たちのまなざしは真剣そのもの。



撮影 鈴木俊介

教室を飛びだして

みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2014

今年9月からの開催に向けて、教育を大切にしたい新しい芸術祭の準備が進められています。その「山形ビエンナーレ2014」についてご紹介します。



ちの山形県に、今年、新しい芸術祭が生まれる。その名は「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2014」。主催するのは東北芸術工科大学。美術大学による開催とあって、東北の若い人や子どもたちを強く意識している。「教育」を大きな使命と捉え、来場者が芸術を知り、創造的な表現に踏み出すきっかけとなることを目指した芸術祭だ。

コンセプト「東北の入口を見つけよう」には、東北の魅力や文化に触れる自分なりの「入口」を、来場者に見つけてほしいとの思いが込められている。これは、芸術監督を務めるアーティスト・絵本作家の荒井良

二さんが過去に関わってきた「山形の入口」を探す展覧会、「荒井良二の山形じゃあにい」と思いを同じにする。2012年に開かれた同展覧会では、まちの写生大会や映像づくりのワークショップなどを行った。

「芸術は大人だけのものじゃない。子どもたちも含めた、芸術のお祭りをつくりたい」とは、荒井さんの言葉。本芸術祭は、地域の子どもや大人、学生たちに広く開くということを大切に考える。荒井さんをはじめとした参加アーティストとともに、漫画や会場周辺マップをつくるなど、人々が集い、創造するプランが構想されている。新しい芸術祭が、東北の地の芸術の種を育てていく。



荒井さんになりきってまちの風景を写生する「なりきり荒井良二100人の写生大会」(2012年)の様子。

※みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2014
山形県山形市にて、
2014年9月20日から10月19日まで開催。
<http://biennale.tuad.ac.jp>

放 課 後
第 5 回
A R T